

27年度版教科書つれづれ 9 「世界でいちばんやかましい音」(東京書籍・小学5年)の巻

加藤 郁夫 (読み研事務局長)

「世界でいちばんやかましい音」は東京書籍・小学校5年(上)の物語である。ベンジャミン・エルキンというアメリカの作家の作品である。23年度版(以下旧版)と27年度版(以下新版)での文章の違いはない。

はじめに、「世界でいちばんやかましい音」のあらすじを紹介しておこう。

世界で一番やかましいガヤガヤという都の話である。そこは、人々がやかましいことを自慢している国だった。ある日、ガヤガヤの王子が誕生日のプレゼントとして世界で一番やかましい音を聞きたいと言う。王様は世界中の人が一人残らず同時にどなるように、世界中の国に手紙を送って王子の願いを叶えようとする。そして、人々もその願いに応えようとする。ところが、ある奥さんが、世界で一番やかましい音を自分も聞いてみたいと思う。そこで、口だけ開けて声は出さずに、その世界一やかましい音を聞こうと考え、その考えを旦那さんに話す。そして、その考えは近所の奥さんに、その旦那さんへ、さらには職場の同僚へと広がっていく。いよいよ世界一やかましい音を聞く瞬間になり、皆が耳を傾ける。しかし、誰も声を出さず沈黙の時間が訪れる。人々は王子に申し訳ないことをしたと思うが、その瞬間、王子がうれしそうに手をたたいているのを知る。王子は、沈黙の時間に聞こえてきた、小鳥の歌や風の音にとても感動したのだった。それから、ガヤガヤの都は、世界で一番静かな都になった。

ここでは、学習の手引きの違いについて考えてみたい。そのために、この作品を私がどのように読んでいるかを先に示しておく。作品の構造表を以下に示す。

○冒頭	もう、ずいぶん昔のことです。……
○発端	さて、あと一月半もすると王子様の……
○山場のはじまり	さて、いよいよギャオギャオ王子の誕生日が……
◎ — 最高潮	王子様がうれしそうに手をたたいているのです!
○結末	……王子様は、それがすっかり気に入りました。
○終わり	……世界でいちばん静かな町

この物語の事件は、王子が世界で一番やかましい音を聞きたいと言い出すところから始まる。世界で一番やかましい音を聞こうとすることが主要な事件といえる。したがって発端は、上記の箇所でも異論ないであろう。

問題は、クライマックスである。候補は大きく二つある。

A 何百万、何千万、何億という人が、世界でいちばんやかましい音を聞くために耳をすましました。そして、その何億という人の耳に聞こえたのは、全くのちんもくでした。

B 王子様がうれしそうに手をたたいているのです！

Aは、世界で一番やかましい音が聞こえると思っていたら、反対に沈黙だったという、大きな変化が見られる。王子が望んだ世界で一番やかましい音というプレゼントは実現せず、失敗に終わったのである。「十五秒前……十秒前……五秒前……／三、二、一、それっ！」と世界で一番やかましい音が聞こえる瞬間へ焦点化していくという緊張感も高いところである。

しかし、世界で一番やかましい音が失敗に終わりそうな予感を読者はすでに持っている。世界で一番やかましい音を聞いてみたいという一人の奥さんから始まった動きは、「ギャガヤの街の人たちさえ、そのときが来たら、口だけは開けて、声は出さないで、ほかの人のさけぶ声を聞こうと、ひそひそ言い交わすようにな」ってきたのである。みんながみんな「わたし一人くらいだまってたって、分からないわ」と考えているのである。そのような人々の思いを読者はすでに知っている。だから、Aの箇所は、読者からすれば「ああ、やっぱりな」と思うのである。その意味では、あまり衝撃的ではない。なおかつ、この話は世界で一番やかましい音というプレゼントが失敗したという話なのだろうか。失敗して、王子が悲しんだというのであれば、Aの箇所がクライマックスでもよいかもしれないが、王子は沈黙が訪れたことで結果的にはよろこぶのである。世界で一番やかましい音というプレゼントが失敗に終わることで、沈黙が出現することで、王子はこれまで聞くことがなかった小鳥の歌や木の葉のそよぐ音を聞くことができたのである。つまり、プレゼントが失敗に終わることで、結果的に最高のプレゼントを王子にしたことになる。

したがって、Bがクライマックスにふさわしいといえる。構造表では、一文で示したのであるが、

まさかと思いましたが、まちがいありません。王子様です。王子様がうれしそうに手をたたいているのです！王子様は、しきりにはしゃいで、とんだりはねたりしながら、庭の方を指差していました。

この三行のまとまりをクライマックスとしてもよいだろう。再度、クライマックスの理由を整理しておこう。

①世界で一番やかましい音が聞こえなかったが、王子が喜んでいる。

→人々は（そして読者も）、世界で一番やかましい音が聞こえなかったのだから、王子はがっかりしたと思っている。しかし、反対に王子が喜んだという逆転がここにはある。

②王子が、やかましい状態ではなく、正反対の静まり返った状態を喜んでいる。

→「どんなに音をやかましくしても、これで十分という気持ちになれ」ない王子が、沈黙の時間をよろこんでいるのだから、王子の変化があったといえる。

③世界で一番やかましい音というプレゼントが失敗に終わったことが、王子の喜びにつながっている。

→失敗から成功への転換

旧版の手引きは次のようになっていた。

●「設定」「展開」「山場」「結末」の部分を確かめて、物語の構成をとらえましょう。

新版の手引きは次のようになっている。

◆物語の構成をとらえ、山場で起きた変化について考える。

この二つを比べてみると、旧版は物語の構成をとらえることに主眼をおいていたのに対し、新版では、構成をとらえることと山場での変化を考えることの二つのことを述べている。新版では、山場の変化をとらえる課題が一つプラスされたようにも見えるのだが、それだけの変更ではない。

旧版では、1 ページをかけて物語の構成について以下のように丁寧に説明をしていた。

「世界で一番やかましい音」は、「設定」「展開」「山場」「結末」の四つの部分からできています。

(中略)

〈設定〉物語に関わる、「時(いつ)」「場(どこで)」「人物(だれが)」などについて説明している部分です。

〈展開〉出来事が「山場」に向かって展開していく部分です。

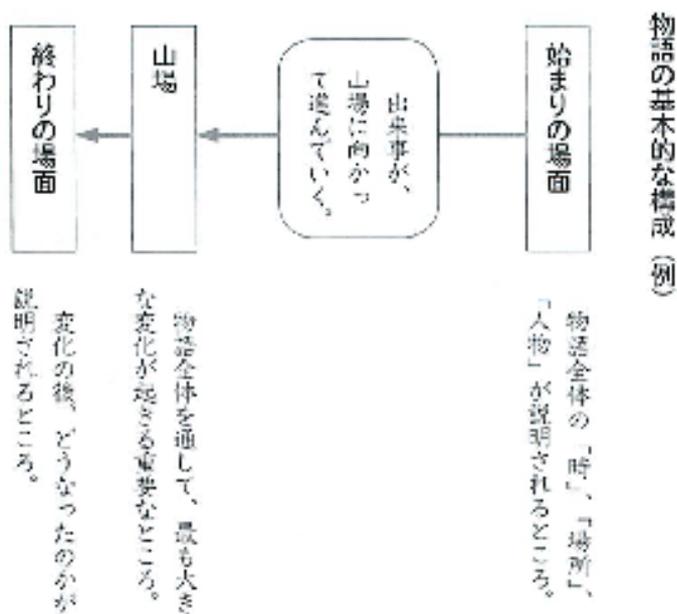
〈山場〉大きな変化が起こる、物語の中で最も重要な部分です。特に、中心となる人物の気持ちや考え方の変化に気をつけて読みましょう。

〈結末〉「山場」で大きな変化が起こった後のことがえがかれている部分です。

ところが新版では、旧版で用いられていた「設定」「展開」「山場」「結末」という用語が「山場」を除いて用いられていない。その上、以下のような説明になっている。

- ・物語全体を通して、最も大きな変化が起きる重要なところ。山場。
- ・物語全体の「時」、「場所」、「人物」について説明されているところ。
- ・山場で変化が起きた後、どうなったのかが書かれているところ。

この順番も気になるころではある。なぜ「山場」を一番初めにもってくるのだろうか。どのような物語であれ、山場から始まるものはない。「時」、「場所」、「人物」の説明がはじめるのが普通である。その意味では、山場の説明を一番にすることは、子どもたちに誤解を与えかねない。そして、次の図が示されている。



「始まりの場面」「山場」「終わりの場面」の三つと、「出来事が、山場に向かって進んでいく。」

とでは、書かれ方が違う。「設定」「展開」「山場」「結末」の四つの部分としていた旧版から見ると明らかな後退といえる。

指導要領の解説においてすら「文章全体の構成としては、例えば、物語では、『状況設定－発端－事件展開－山場－結末』など」があると述べているのである。なぜここで「展開」という用語を用いなかったのであろうか。

読み研では、物語の構成として「導入部・展開部・山場の部・終結部」という用語を用いている。もちろんその用語をそのまま教科書で用いることを求めるものではないが、物語の構成をきちんと教えていこうとするならば、それにふさわしい用語といっしょに教えるべきである。現に、旧版では「設定」「展開」「山場」「結末」という用語をはっきりと示していた。それを先に示した図のように「始まりの場面」「山場」「終わりの場面」とすることは、この物語がこの三つの場面から成り立っているかのような誤解を与えかねない。不可解な改訂と言わざるをえない。

先にも述べたように、旧版は物語の構成をとらえることに主眼をおいていたが、新版ではもう一つ山場について考えるところを加えている。いや、「世界でいちばんやかましい音」の一番最初のページに「物語の山場をとらえよう」と書かれているように、新版の手引きの主眼はむしろ山場について考えるところにある。手引きが書かれている3ページの中だけでも「山場」という言葉は、15回も使われている。

重点を絞ることで、子どもたちが何に取り組めがよいのかがわかりやすくなっている。この点は評価できる。ただ、それだけに先に述べた物語の構成の説明を曖昧にしまった点が惜しまれる。

最後にもう一つ。山場に関わって「山場で起きる変化の多くは、中心となる人物の変化に関わるものです」と新版では説明されている。確かに、この作品ではやかましい音を好んだ王子が、静かさが好きになる。その点では王子の変化がはっきりと読み取れる。しかし、導入部と終結部には王子は登場していない。導入部では「世界でいちばんやかましい町」ガヤガヤが紹介される。そして終結部では「世界でいちばん静かな町」になったガヤガヤが語られている。静かさを気に入った王子がその後どうしたかというようには語られていない。王子の変化を通して語られるのは、町の変化なのである。王子一人が変わった物語ではなく、「世界でいちばんやかましい音」を聞こうとすることを通して、町の人々も変わるのである。静かだったからこそ、人々は王子がよるこぶ音を聞くことができたのである。そのように考えてくると、先に示したクライマックスの四番目の理由として、次のようにいえるのではないだろうか。

④静かであることで、ガヤガヤの町の人々は、王子が喜んでいることが分かった。

→静かであることで、他の人（周りの人）の様子に注意を向けることができることがわかった（町の人々は静かさの価値を発見した）。

そうすると、導入部では「これよりガヤガヤの都／世界でいちばんやかましい町」とあったのが、終結部で「ようこそ、ガヤガヤの都へ／世界でいちばん静かな町」と変わっている意味も見えてくる。それは単に「やかましい町」から「静かな町」への変化だけではない。「これより」は単にここからガヤガヤだということを示しているだけである。しかし、「ようこそ」は町を訪れる人を喜び迎える挨拶である。そこには、自分がやかましい音を出すことしか考えていなかった人々が、静かさの価値を発見することで、他人のことを意識し、考えるようになった変化が読み取れるのでは

ないだろうか。

王子を「中心となる人物」（しばしば中心人物ともいわれる）と見ることは、王子の物語としてこの物語を読み取ってしまう危険性をも併せ持つ。四年生の『一つの花』（今西祐行）では、「中心となる人物」をだれにしたらいいのだろう。『ごんぎつね』（新美南吉）では、「中心となる人物」はごんなのか、それとも兵十なのか。二年生の『お手紙』（アーノルド・ローベル）の「中心となる人物」はがまくんなのか、かえるくんなのか。「中心となる人物」という考え方が、有効に機能する作品もあるが、かえってそれが作品の読みを阻害する場合もあることをしっかりとおさえておきたい。